

## はじめに

- ・日本の古墳を代表する古墳 ・「室大墓」として古くから有名

### 1 宮山古墳と古墳の編年

- ・古墳の編年において重要な指標—古墳時代中期前葉（6 期）（図 1）
- ・墳形 3 段築成の前方後円墳（238m）、造出、（盾形周濠・外堤）  
埋葬施設—竪穴式石槨＋長持形石棺 副葬品（鏡・石製品など前期的）  
葺石 黒斑のある器財形中心の埴輪（人物・動物出現前）
- ・中期—百舌鳥・古市古墳群の時代（図 2）  
大和王権の政治体制が首長連合体制だった段階の成熟期
- ・5・6 期に古墳の様式が完成—だが、巨大墳の実態不詳—宮山古墳が代表

### 2 宮山古墳の埴輪とその配列

- ・すばらしい埴輪と後円部頂上での配列判明—巨大前方後円墳では稀
- ・前方後円墳完成時の想像図（図 3）
- ・墳丘表面に葺石・埴輪・木製品などで一つの世界を表現—それは何か

### 3 古墳とは何か

- ・古墳は墓であるとともに、葬送儀礼の重要な舞台装置
- ・墳丘の表面に他界を表現（古墳は他界の擬えもの）
- ・埴輪は他界を可視的に表現するためのアイテム（小道具）  
仏教（浄土）以前の最古の他界表現—儀礼での古墳の役割は何か

### 4 古墳時代の葬列とその筋書き

- ・当時は人が死ぬとその魂は船に乗って他界へ赴くと考えられていた
- ・古墳と船 天理市東殿塚古墳—突出部の埴輪に船の絵（図 4 上）  
三重県宝塚 1 号墳（図 4 中）などの船形埴輪（造出周辺出土）  
広陵町巢山古墳周濠出土の準構造船（直弧文、赤塗、図 4 下）
- ・『隋書』倭国伝「葬に及んで屍を船上に置き、陸地これを牽くに」（喪船）
- ・葬列—魂が他界へ赴く様子を模擬的に実践—行先の古墳に他界
- ・前方後円墳などを造る範囲—共通の他界観とそれを表現した墓制を共有
- ・古墳時代の死者の冥福を祈るかたち

## 5 埴輪配列の筋書き

他界への長い船旅を終えた死者の魂は、他界の出入口で船を降り（船、魂が確実に他界に着いた証）、浄水で禊ぎをし（圀）、儀礼の場（造出）で他界に入るための儀式を行った後、岩山（葺石で覆われた墳丘）を登り、頂上にある防御堅固で（武器・武具）威儀を正した（蓋）屋敷（家々）に住むことになり、屋敷には、日々、海の幸・山の幸が供えられた（小型土器、食物形土製品）。埴輪列はおもに、飲食物を入れた壺とそれを載せた器台を表す朝顔と、器台である円筒から構成されているが、それは兆域の結界として用いられたとともに、他界は飲食物に充ち満ちていることも表していた。

他界は当時の人びとにとって、理想の世界だったと思われる。

## 6 長持形石棺

- ・長持形石棺—蒲鉾形の蓋石＋上辺が円弧を描く短側石。基本は竜山石製
- ・畿内連合の有力者とその関係者間で共有（図 5）—舟形石棺と分布差
- ・最高位—突起 2.2 型式の棺＋結晶片岩板石積み堅穴式石槨（図 6）
- ・蓋の格子状突帯—棺を縛る帯の痕跡（図 7）正倉院「櫃覆町形帯」（図 8）

## 7 被葬者像

- ・大和王権下、古墳の形と規模は被葬者の政治的地位を反映（古墳の秩序）
- ・宮山古墳の被葬者は大王・有力大王一族につぐ有力首長  
百舌鳥—百舌鳥陵山古墳（履中天皇陵古墳）365  
古市—仲津山古墳（仲津姫命陵古墳）290・墓山古墳 225  
佐紀—市庭古墳 253・コナベ古墳 204  
馬見—築山古墳 210 島ノ山古墳 200
- ・葛城襲津彦などはイメージとしては合う
- ・単独—中期に同じ墓域で古墳が継続するのは上記以外少ない—日本特徴あっても 2、3 基ほど。単独で終わるもの少なくない—王権の関与大

## おわりに

参考文献（他は各報告書・概報による）

天野末喜 1993「大王墳の移動は何を物語るか」『新視点 日本の歴史』2 巻、新人物往来社  
奈良国立博物館 2018『第 70 回正倉院展目録』  
兵庫県立考古博物館 2019『埴輪の世界』（特別展示図録』NO.25）  
和田晴吾 2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館

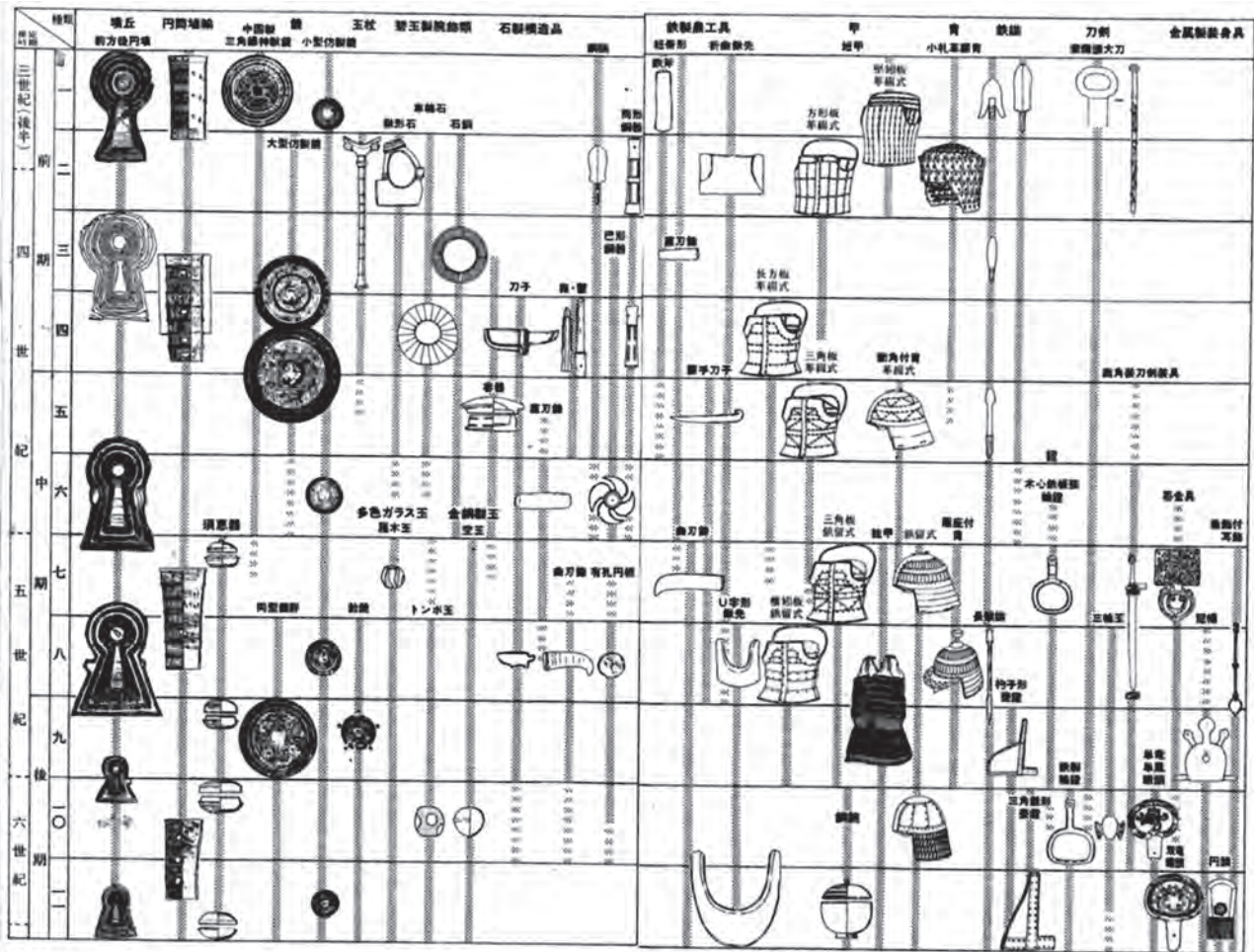


図1 古墳時代編年表

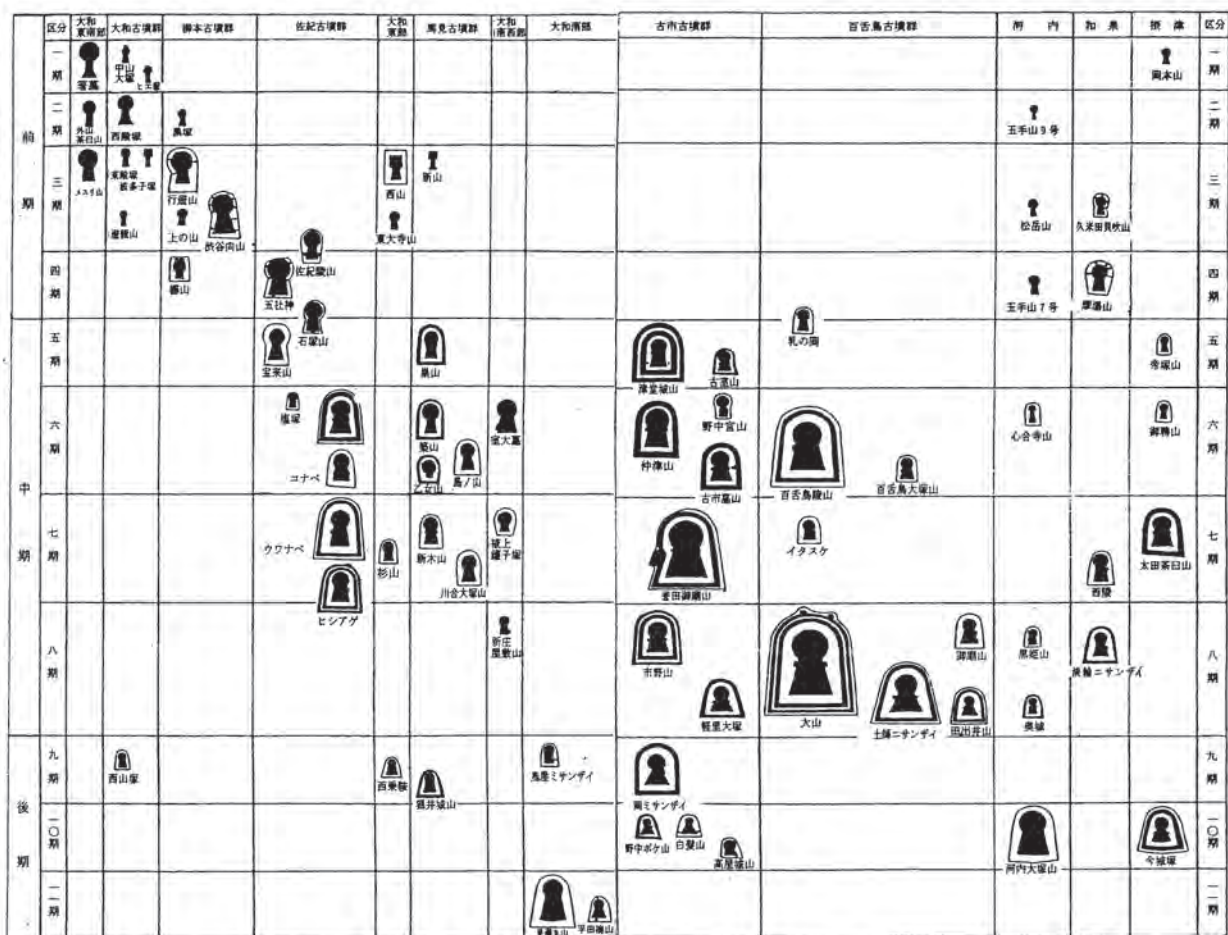


図2 奈良県・大阪府の主要古墳編年図(天野1993、一部変更)



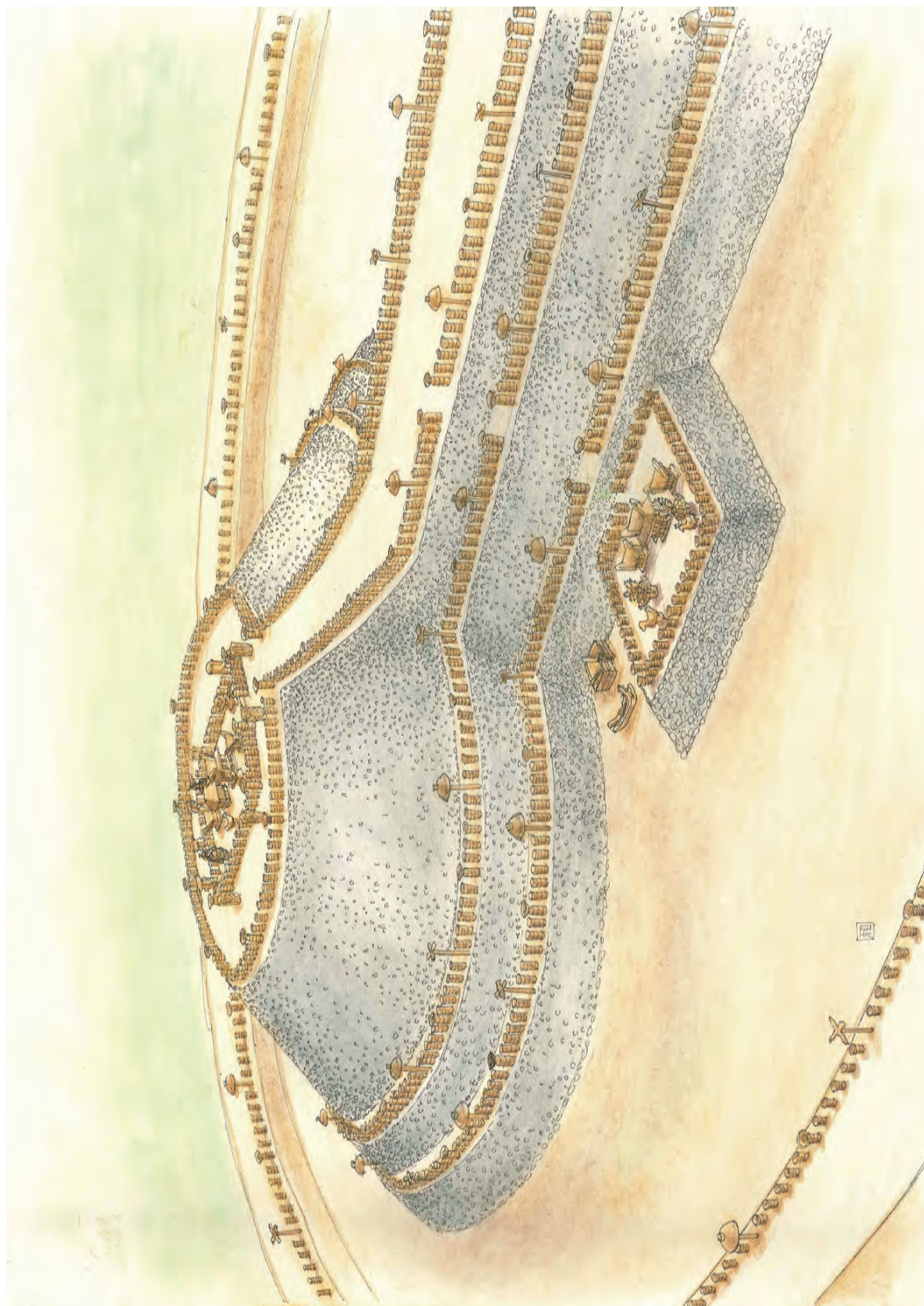
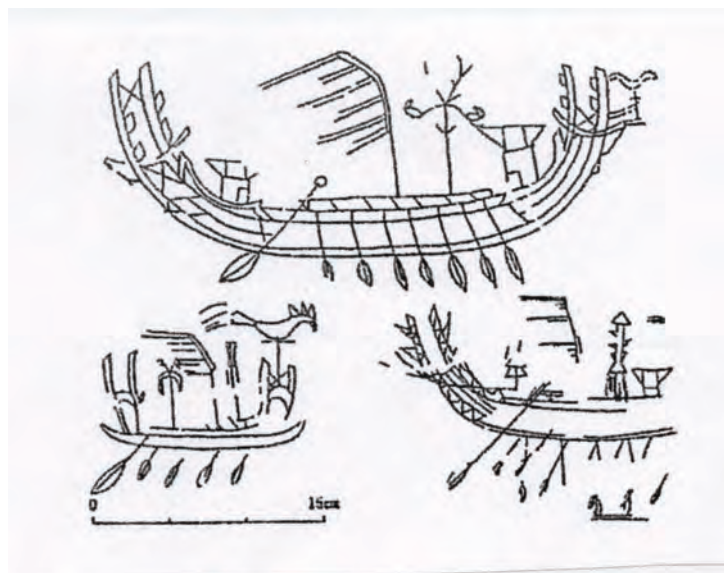
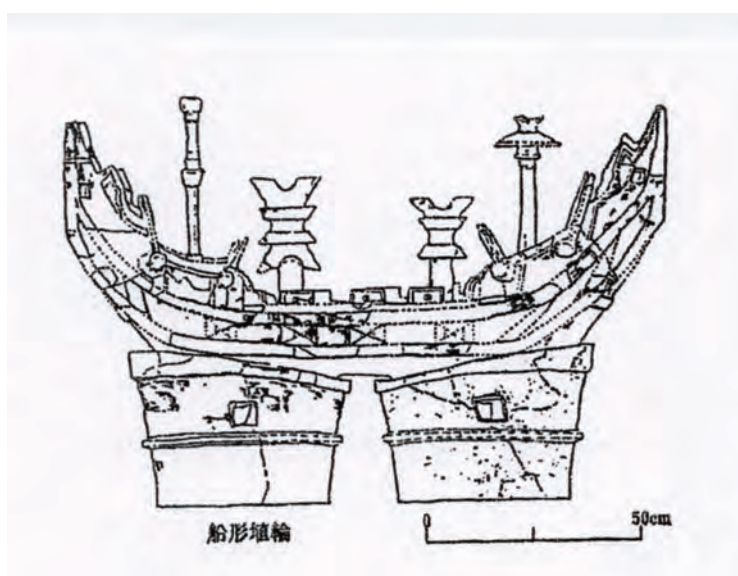


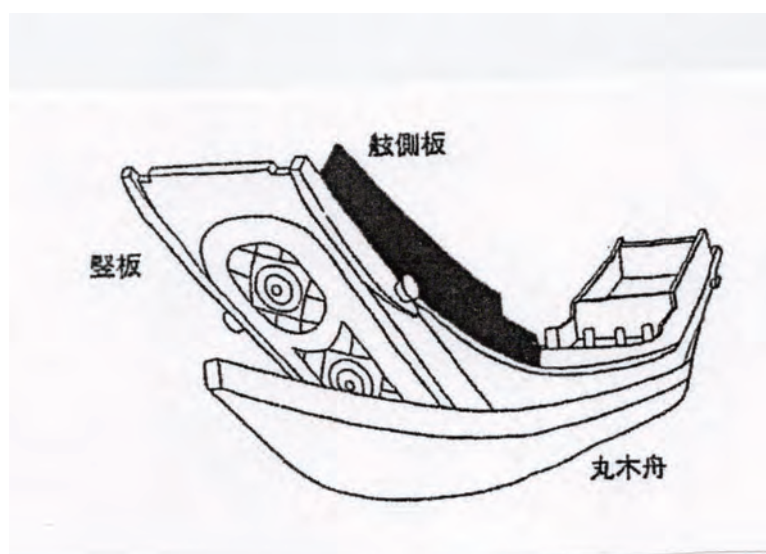
図3 前方後円墳完成時の想像図（兵庫県立考古博物館、2019、原図・早川和子）



上 東殿塚古墳



中 宝塚I号墳



下 巢山古墳

図4 古墳と船



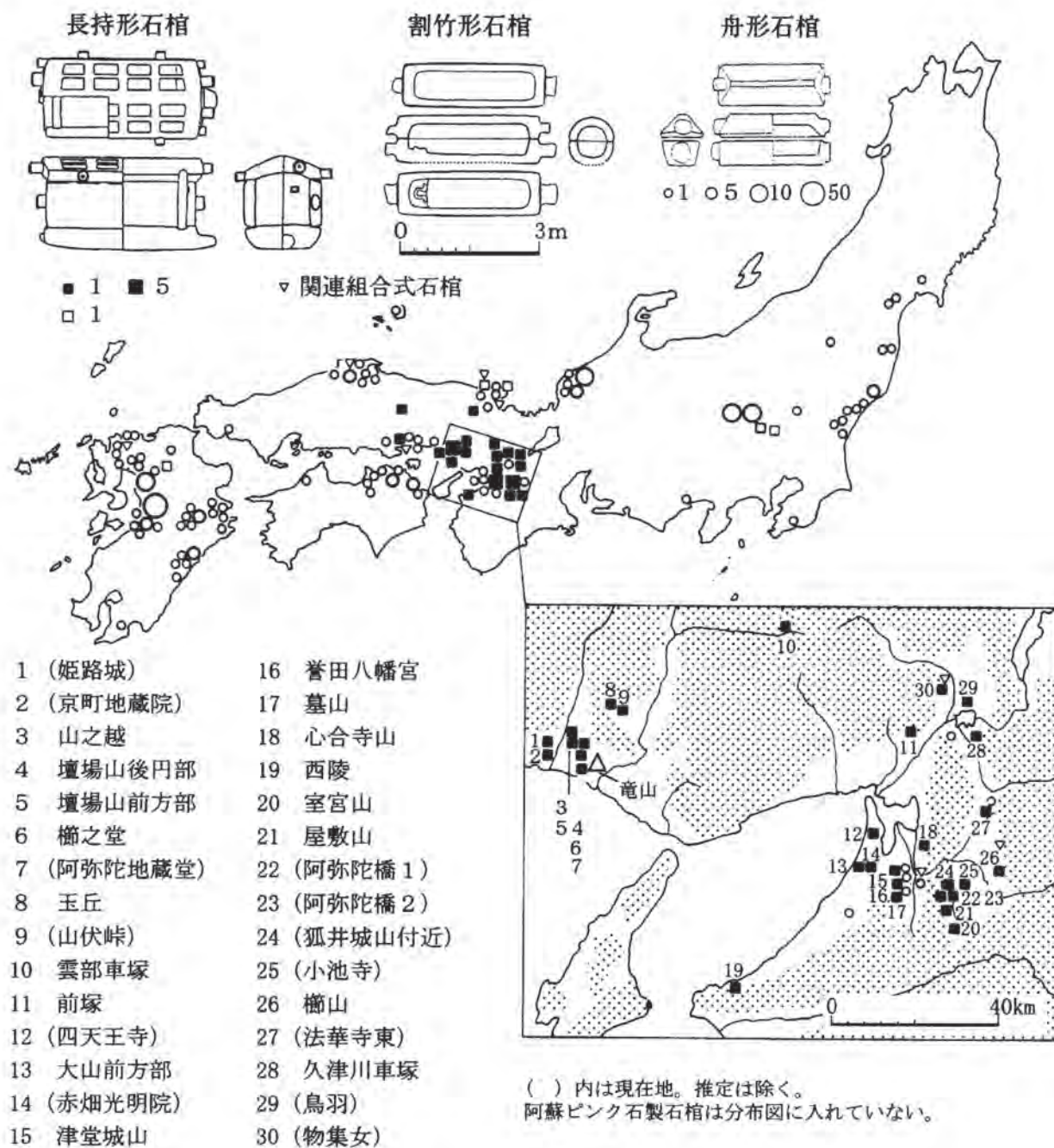
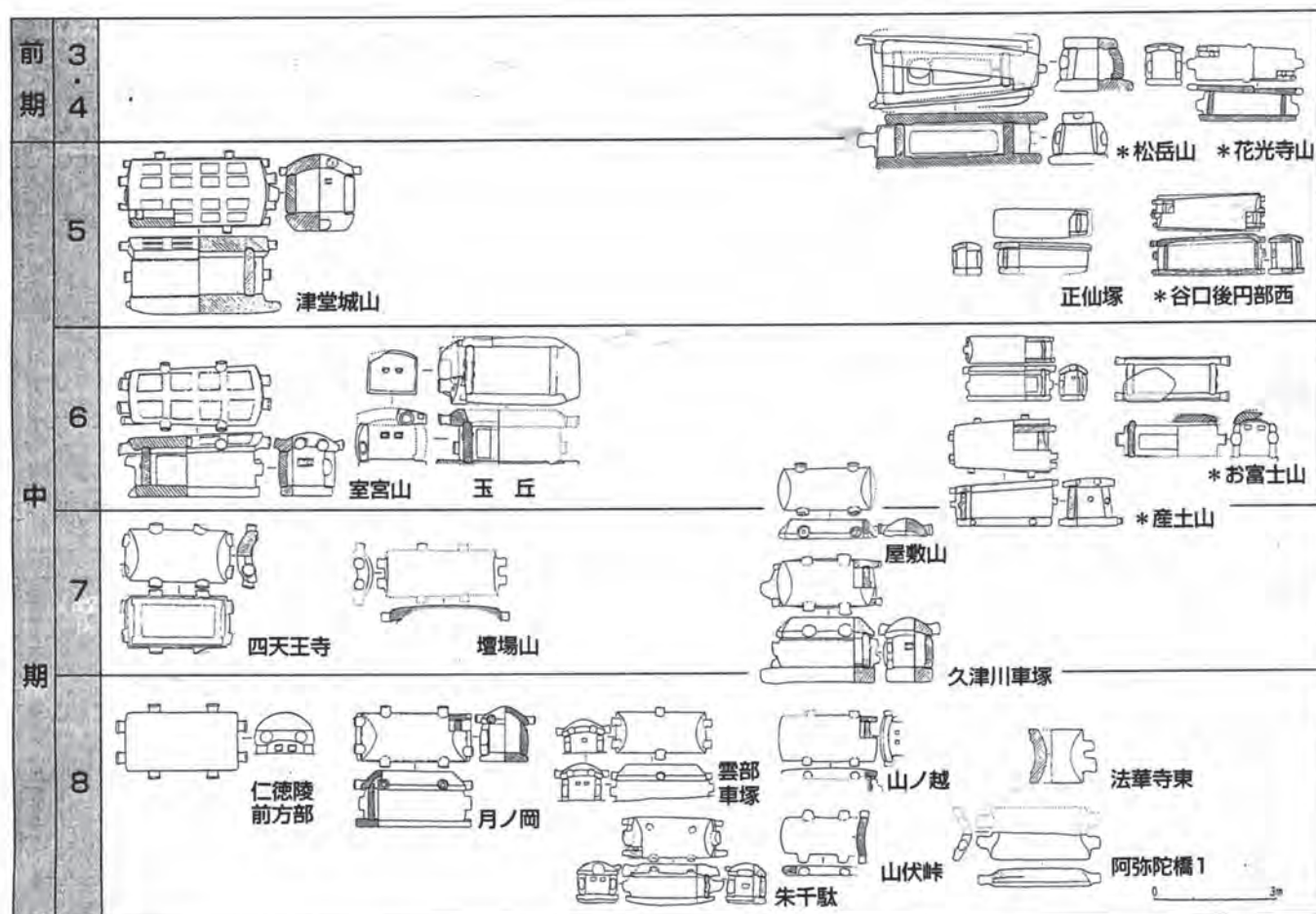


図 5 長持形石棺・舟形石棺分布図



| 時期 | 型式  | 2・2                                       | 2・1          | 1・2            | 0・2 | 2・0                    | 1・1 | 0・0                            | 不詳 | 関連石棺                                                                                                                 |
|----|-----|-------------------------------------------|--------------|----------------|-----|------------------------|-----|--------------------------------|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 前期 | 3・4 |                                           |              |                |     |                        |     |                                |    | *松岳山●130縦<br>*花光寺山●90直                                                                                               |
| 中期 | 5   | 津堂城山●208縦<br>櫛山●150縦                      |              |                |     |                        |     | 正仙塚●52直                        |    | *乳ノ岡●155直<br>*谷口●77横                                                                                                 |
|    | 6   | 出石<br>(玉丘●108直)<br>室宮山●238縦               |              |                |     |                        |     | *お富士山●125直<br>前塚○80直 *天神山●210直 |    |                                                                                                                      |
| 後期 | 7   | 四天王寺<br>壇場山●140直<br>(西陵●210縦)             |              |                |     | 屋敷山●135縦<br>久津川車塚●180直 |     |                                |    | 【凡例】<br>● 前方後円墳 ○ 円墳<br>◎ 帆立貝形古墳 □ 方墳<br>数 墳丘規模<br>縦 縦穴式石槨 直 直葬<br>横 横穴式石室 ( ) 型式推定<br>* 竜山石以外の石材<br>他は竜山石 (共に推定を含む) |
|    | 8   | 月ノ岡●95縦<br>仁徳陵●486縦(前)馬場ノ内・直<br>雲部車塚●140縦 | *<br>朱千駄●65直 | 山之越□55直<br>山伏峠 |     | 法華寺東<br>阿弥陀橋1          |     |                                |    |                                                                                                                      |

図6 長持形石棺の編年と墳形・突起数・石槨

\*以外は、竜山石、あるいは竜山石と推定されるもの。



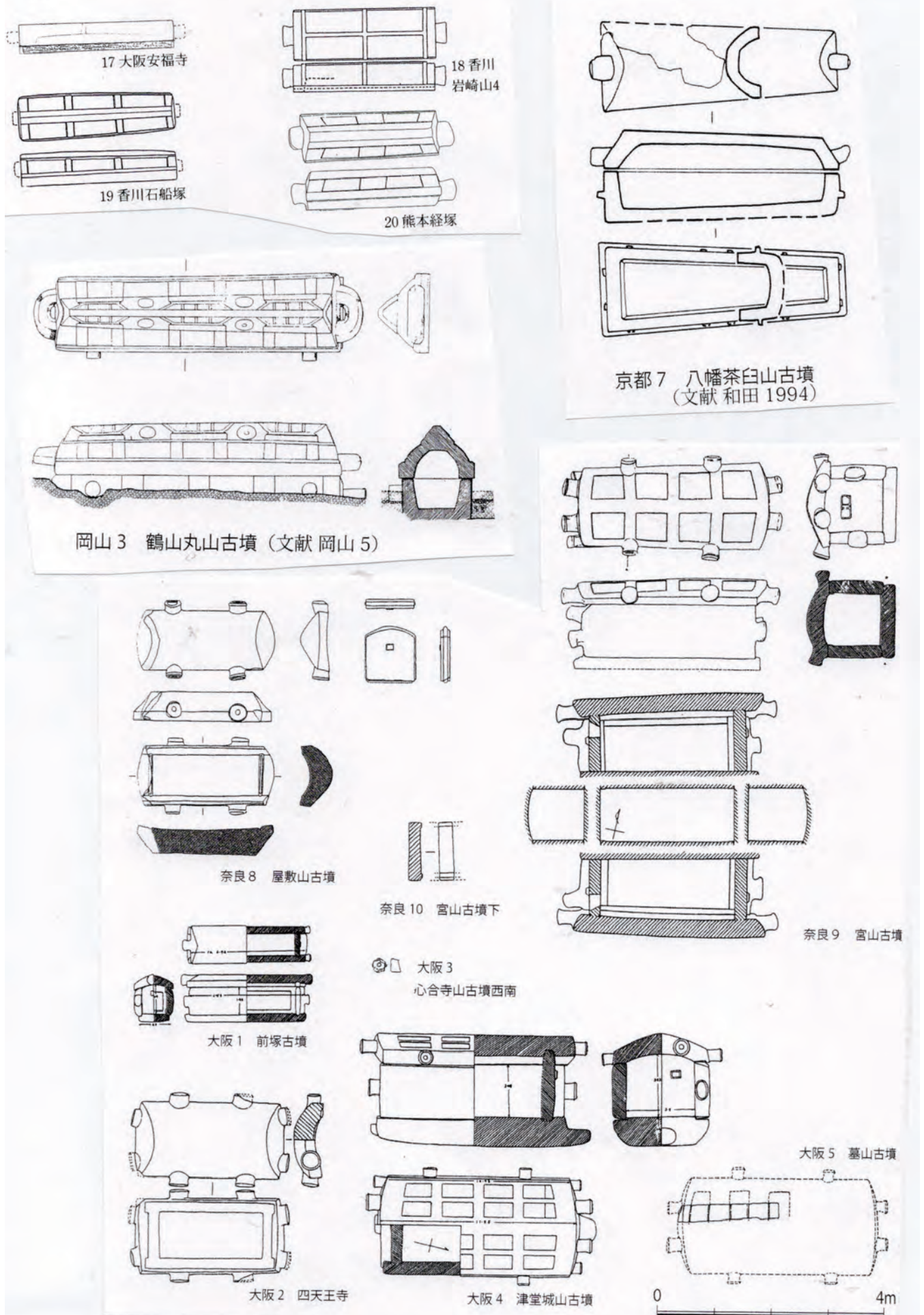
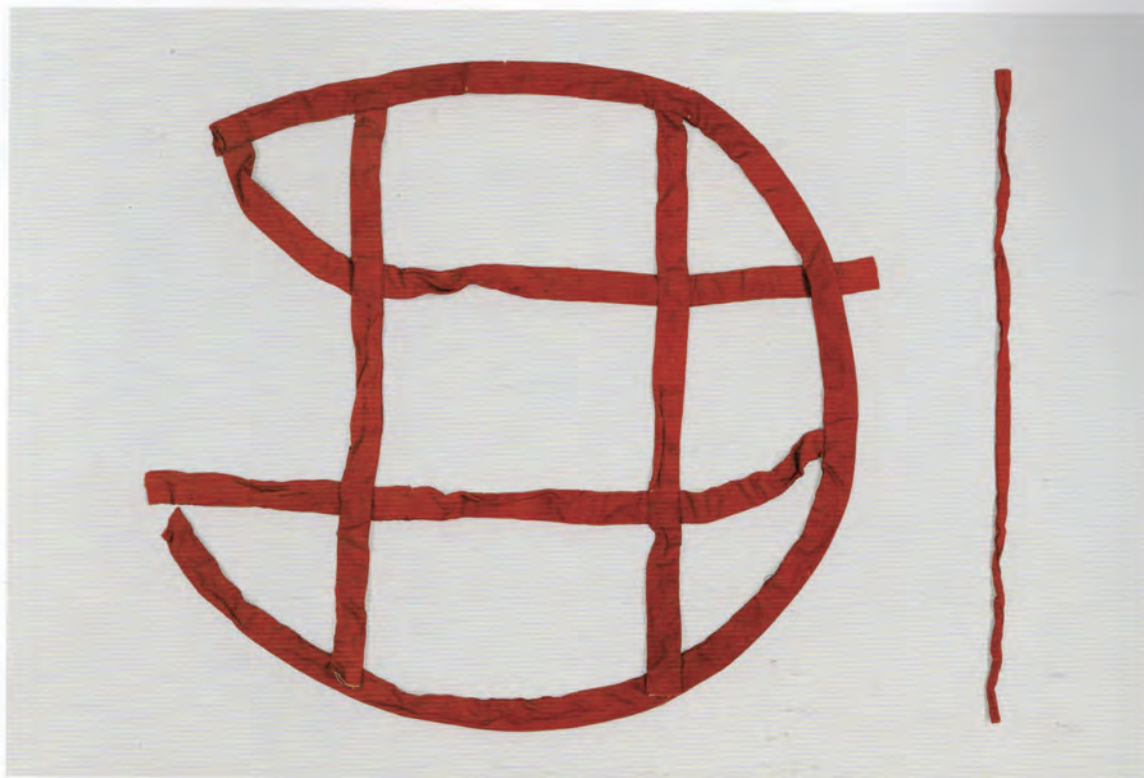


図7 舟形石棺と長持形石棺の突帯





# 14 南倉

## 櫃覆町形帯（櫃覆いの押さえ帯）

一条  
帯幅六 周長三四〇

二枚折した麻布を芯にして赤糸で包み縫い付いた四本の帯紐を縦横二条ずつ交差させ、その周囲を楕円形の帯紐で囲んで綴じ付けた形状の帯。類品が三十点余り宝庫に伝来しており、それらと比較すると本品は周囲にめぐらされる楕円形の帯の一部を欠失していることがわかる。帯表面の赤糸に「東大寺櫃覆町形帯 天平勝寶八歳五月二日」の墨書があり（写真向かって左の縦帯紐）、天平勝寶八歳（七五六）五月二日は聖武天皇の崩御の日にあたることから、聖武天皇の喪葬に関わる品を納めた櫃の覆いを押さえるために用いられたと考えられ、井桁状の部分が櫃の蓋に懸かって、櫃の覆いを押さえたものと理解される。

同様の作りの幅三センチメートル、長一二五センチメートルの紐一条が附属しており、両端の表面にそれぞれ「東大寺櫃覆紐」「天平勝寶五月二日」との墨書が認められている。櫃の牽引や運搬に使用されたと考えられるもので、他にも同様の紐・綱等が宝庫に伝来している。

近年の調査で、麻布製の芯に「伊豆国印」の朱方印及び「□□勝寶七歳十月」の墨書銘が確認され、伊豆国（現在の静岡県伊豆半島及び東京都伊豆諸島）より貢納された調庸布であることがわかった。貢納された翌年には早速使用されたことが判明する点は興味深く思われる。

また近年の調査によって、芯の麻布は大麻製であることが、糸は日本茜で染められていることなども明らかになった。

なお、名称にある「町形」については詳らかではないが、「町」には区画するという字義が有り、帯を交差させた状態をそのように称したとみる説がある。（清水）



「伊豆国印」



紐端部墨書



紐端部墨書



墨書

ひつおいましがたのおび

図8 正倉院の櫃覆町形帯（奈良国立博物館 2018）